

Title	石原謙の病と死から学ぶ
Author(s)	平山, 正実
Citation	聖学院大学総合研究所, No.34, 2006.2 : 134-142
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4293
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

石原謙の病と死から学ぶ

平山正実

今日のシンポジウムの構成から考えますと、関先生は「悲嘆と信仰」の総論をお話くださったと思います。鶴沼先生は親しい他者、すなわち藤井武の奥様の死、これは死生学では「二人称の死」というふうに一応定義していますが、この問題を深く取り上げてくださいました。関先生はお話の中で、悲しみの問題はその社会との関係や、共同体との関係の中で考えていかななくてはいけないとおっしゃいました。私は、悲しみを悲しみとして感受する力のない社会というのは、「三人称の死」としてとらえられるのではないかと思います。

ですから、両先生は三人称の死の問題と二人称の死の問題をとりあげられました。それに対して私がかれから考えようとするのは、「一人称としての死」としての悲

しみの問題です。すなわち、当事者が実際に悲嘆に直面したときに、それをどういうふうにかえるかというのがここで私が取り上げるテーマです。つまり、このシンポジウムは一応、三人称の悲嘆、二人称の悲嘆、一人称の悲嘆について論じているというふうにまとめられるのではないかと思います。

石原謙のライフ・ヒストリー

私は、日本におけるヨーロッパ中世キリスト教思想史を専攻された石原謙先生の、病と死から悲しみの問題を考えました。鶴沼先生のように細かい年表はつけませんでしたけれども、そのアウトラインを紹介しますと、石原謙先生は一八八三年に東京本郷の地に生まれ、その後、東北大学やいろいろな大学で教鞭をとられて、最後は東京女子大学の学長を歴任され、文化功労賞や文化勲章を受賞されました。つまり、学問の分野で非常に大きな働きをされた方です。若い方はご存じないかもしれませんが、キリスト教を勉強する学徒は、石原先生のご本

を読まれた方も多いのではないかと思います。

驚くべきことに石原先生は九〇歳のときに『キリスト教の源流とその展開』（岩波書店）という上下一二〇〇ページのご本を書かれました。そのことを考えるとき、高齢化社会、あるいは超高齢化社会というふうに現代社会は言われますが、人間の創造力は年齢を越えて広く深くひろがってゆく可能性があると考えます。その意味で先生のお仕事は後につづく我々に希望を与えてくださいました。親鸞も七〇歳代の後半から八〇歳代の前半にかけて十数冊の本を書いております。石原先生も九〇歳でこれだけのエネルギーを持つて書かれたということは、人間の創造性というものは、いくつになっても大きな可能性を秘めていることを示唆していると思います。

しかし、先生は最後まで健康であったわけではなく、八四歳のときに脳梗塞のために手足が不自由になられました。書庫への上り下りや万年筆で執筆するのに非常に苦労をされた。『キリスト教の源流とその展開』はそういう中での執筆だったのです。先生は九〇歳になってこの本を書かれている最中も、まだこの本は完成していな

い、校正原稿を見直せば見直すほど不完全なところがあるといわれ、絶えず新しい文献に触れながら、改訂に改訂を加えられたというエピソードがあります。亡くなったのは九四歳です。八四歳から九四歳で亡くなるまでに二度の心筋梗塞の発作があつて、その間に脳梗塞も併発されました。三度目の発作のときに順天堂病院に入院されて治療を受けた後、自宅でお亡くなりになりました。その当時は在宅ケアなどなかった時代ですが、最終的に自宅で亡くなったのです。

石原謙先生は牧師のご子息として生まれ、考えられる最良の精神的な環境の中で育ち、一世紀近い歳月を日本におけるヨーロッパ中世キリスト教思想史の研究の先頭に立つて歩まれた方です。石原先生は、このように大学者なのですが、ここで私が取り上げるのは、そのような学問上の業績のことではなく、先生が亡くなる数カ月から数週間前の間の出来事です。

終末期に現れたせん妄について

まず石原先生の終末期に現れたせん妄について話します。これは第三回目の心筋梗塞の発作のために、順天堂病院に入院した際に、CCU (Coronary Care Unit) に入院されたとき現れました。CCUは心臓をケアする集中治療センターです。このCCUに入室した人は、しばしばCCU症候群が現れることがあります。CCU症候群は、「集中治療の場において、患者の持つている要因、治療上の要因、環境(的)要因が絡み合い精神症状が生じたもの」というふうに定義されています。CCU症候群に見られる精神症状としては、睡眠障害、意識水準の低下、不安感、焦燥感、恐怖感、幻視、幻聴、錯乱、異常行動などを伴うせん妄状態や、被害妄想、抑うつ症状などが現れます。

いろいろな文献(松村克己、白井常、文献一覽参照)を調べてみますと、石原先生の場合も終末期においてまさにCCU症候群の特徴である精神的な孤独、疲労感な

どから一過性の意識水準の低下、幻覚、妄想、不安、不眠、恐怖等の症状が現われています。

このときに石原先生はどういうふう感じられたか。九四歳になつて学の蘊奥をきわめ、信仰的な成熟の頂点にまで到達された先生が、そういう人間の限界状況、すなわち危機的状況に達したときにどのように感じられ、体験されたのか。これが大きな問題だと思います。死の床で、先生は死への不安、恐怖、神の怒りの体験等を実際に口に出されました。このことは、身体と心と霊とが終末期において、相互に密接な関連を持つていることを示唆しています。すなわち、末期になると人間の心理的、身体的、霊的苦しみというものが非常に鮮明な形で浮き上がつてきています。実際に先生が語られた言葉をちよつと拾い集めています。

「お前(石原先生のこと)のやつたことは、なにひとつ神とキリストを喜ばせはしない。つまらない虚栄だと責められると、僕は何も答えられない。幻覚、妄想に苦しめられる夜はつらい」(山本和、文獻一覽参照)。学界では最高峰に位置すると評価されていた方で、われわれに

とつて雲の上の天皇みたいな存在だつた先生の口からこつた驚くべき言葉が出てきた。

「妄想、幻覚に苦しめられる夜はつらい」(松村)、「夜の眠りを奪つたメフィストは、執拗に現れた。輝かしい生涯と業績が僕を攻撃する材料なのだ」「群集に囲まれている自分に気づき、片つ端から『あなたは死とは何か知っていますか』と尋ねたが、誰も答えずに一人去り、二人去りして、とうとう自分一人になつてしまつた。そこで自分にも同じ問いを発してみたが、自分にもやはり答えられなかつた」(以上、白井)。先生は死とは何ぞやということをも自分にも答えられないと言われるのです。人間の生と死の問題を一生研究してきた先生が、最後の場面になつて「死とは何ぞや」というふう問われると、自分は答えられないと言つています。これは死や病が神秘性をもつていふことを意味しています。

もう少し先生の言葉を探つてみますと、「それ以来、毎日のように得体の知れない死の影につきまとわれて、本当に苦しい日々であつた」(白井)。「死の影は逃げようにも、どこまでも追い続け、のしかかつてくる化け物のよ

うな存在なのだ」(白井)。さらにもつと驚くべきことは、「僕はもうだめです。絶望です」(山本)という言葉が出てくる。これは鶴沼先生が藤井武の文章で、「もう折れなくなつた」というあの言葉と通底するものがあるだろうと思います。この偉大な先生にして——偉大なというふうに人間を偶像化することはいけなかもしれないませんが、全精力を傾けて、生涯を通して学問にかけてきた先生、信仰の問題を追求してきた石原謙先生が「僕はもうだめです。絶望です」「肉体的生命の終わりが来て、回復の望みがないということではなくして、精神的な苦悩の告白であり、死ぬに死ねない」(山本)というふうに言われました。「本当の信仰とは何か、どういう態度をもって死、終末、神の審判を迎えられるのか。僕は孤独で不安です」(山本)というふうに語っておられます。

先生は終末期、やはり死の影という幻覚や妄想、不眠、孤独感に苦しみました。その中で死の意味、信仰生活や仕事への反省、苦悩の告白、神の審判への不安を訴え、孤独感を訴えておられます。

主体的な臨死体験と死の客観化

——一人称の死と三人称の死——

これまで先生が書かれてきた死に関する論文の多くは最晩年に書かれたものです。これらの記述に関して先生は、「そこで扱った死は、本当の死ではなかった気がするんですよ」(松村)、こういうことをおっしゃっています。要するに客観的に死というものを学問として研究するということ、そうした死というものを石原先生は、「それは本当の死ではなかった気がするんですよ」(松村)と言われる。どんなに勉強をして学の蘊奥をきわめても、自分の死とは違うと言っておられるのです。ですから我々は死について学ぶこと、教育を受けること、書物を読んで勉強することは、死と自分を客観視し、真実を知るという意味で大切なことですが、それと自分の死との間に乖離がある。

「死は、罪の値である。肉体の死は単に物理的、生物的な事柄ではなく、罪に対する神の裁きであり、死の苦

しみは、神の怒りを示す。これは中世の教会が教えてくれた真理ですが、罪からの救いの道として、教会は修道院、兄弟団の生活、サン・ベルナルやフランチェスコ、その他いろいろなものを残してくれましたが、そのような生活によって従い得ぬ人々に対しても、制度としての教会はサクラメントを提示しました。でも、これはゴマカシであり、問題の逃避です」（松村）と石原先生は言われます。

石原謙先生はすでに述べたように、亡くなる二、三年前から死の問題や終末論に深く思いをひそめて、折に触れて人々にこのテーマについて語ったり、書いたりされました。この点について、先生の一番弟子である松村克己氏が、「石原謙博士の人と学問」という文章を『理想』という雑誌に書いています。その中で「先生は死について論じておられるときは、死は第三者として自分から突き放して見ておられた。しかし、最後の時、先生はこれとは全く違って、死を自分と直接かかわりあるものとして、自分の死と対決されました。そして死とは何かということを探求された。その姿に、私は本当に襟をただす

思いをした」（松村）と書いておられます。

ところで、白井さんという方が、「石原先生御逝去するまでの十八日前」という文章でこう書いています。「白井さん、死ほど実に厳しい悲しいものはないんですよ」（白井）「私は十分生きてきたのだから、今死んでも未練は少しも残らないですが、死の苦しみに耐え抜かれるだろうかと、それを考えると心配です」（白井）と。九十四歳で死ぬ十八日前に、こういうことを率直に言える先生というのは偉大だと思います。大体偉い先生というのはカッコつける。偉くなくても、我々でもカッコつけます。聖人ぶるというか、自分の衣をつける。もつと極端な話、信仰の衣をつけて、いかにも自分が信心深いようなふるまいをする人が多いものです。我々もまたそういう誘惑にかられるわけですが、九十四歳で死ぬ十八日前にこれだけの先生が、「死の苦しみに耐え抜かれるだろうかと、それを考えると心配です」と大変率直に述べられておられる。やはりそういうことが言えるということ、本物ではないかと私は思うのです。

学問一筋で、己のライフワークに最後まで取り組まれ

た石原先生が、聖書に、人間は「裸で生まれ、裸で死ぬ」(ヨブ一・二二)とあるように、ICUという機械の中で真つ裸で寝かされてしまうわけです。まさに裸で死の床にあり、主の前に立たされている。そして、まとうべきは信仰の衣だけになっている。そして、先生は死の臨床において、波乱に満ちた人生を懐古し、今、死と血みどろの戦いをしているということを率直に語っておられます。こういう壮絶な戦いを石原先生はなさったわけです。

死の真ん中の生

最後に「死の真ん中の生」というテーマについて、お話ししたい。一九七七年六月二一日に先生は「光が見えてきた」(松村)と言われます。この言葉が重要です。「光が見えてきた。うれしいではないか」(松村)と石原先生は周囲の人にもらされました。「信仰によってのみ義とされる。主に感謝し、御名を賛美する」「十字架の恩寵、それを私が聞きかかったんですよ」(松村)と

真つ直ぐな眼差しでおっしゃった」。これが亡くなる数時間前のことばです。

石原先生は、神の裁き、怒り、審判、死との苦しい戦いをへて、キリストの救いの確信のもとに、神の手に全てを委ね、安らぎの中で新しい生を獲得していかれた。終末期医療で最も大切なのはターミナルケアだと言われます。このターミナルという言葉はギリシャ語でテロスといいます。テロスというのは終末という意味だけではなく、目的という意味があります。生きる意味を追求することが信仰の生涯の最終目的であるはずですが、石原先生はそれを、臨終の床で「光が見えてきたではないか」という言葉でしめくられました。最終的に先生はこの一点において死に勝利をされた。そういうふうに私は思っています。

その後、死後のことに関して、石原先生は、「自分が死んだら、通夜はやめてほしい。葬儀もできればしてほしい。家族と親しい少数の者が集まり、記念会のような催し物をしてほしい。そこで神への感謝と賛美を主とした楽しく明るい集いをしてもらったら、遺された者

たちへの慰めと喜びとなろう」(松村)というようなことを言われています。

最後に、「臨死患者に対する助け手の必要性」について述べておられることが印象的です。「信仰の友として、死に打ち勝てるように助けてくれるでしょうね」(松村)と友人に石原先生は語られました。その後が重要です。

「今日の日本のキリスト教は、私の生死の問題に何も答えてはくれない。僕は孤独に闘っている」(松村)。これは現代医療に対する痛烈な批判です。「死にゆく人々について、その悲しみに対して、みんないろいろなことを言ったり書いたりしているけれども、本当に助けてくれる人がいない」「私は側にいて支えてくれる助け人を必要としている」「その人に教えを乞いたい」(松村)ということを言われている。ここで石原先生が悲しみの中にある人に対して援助する人が必要であるということを描き添えておられる点に注目したいと思います。

石原先生の生涯にわたるライフワークは、ヨーロッパ中世キリスト教思想史でありました。この研究の中で石原先生が明らかにしたことは、中世教会においてルター

を中心に明確にされた真理は、神の怒り、審判、義の成就ということでありました。これらのことをきつちりと受けとめなければ、宗教改革者の福音の理解や信仰の意味もわからない。石原先生は死の臨床の中で己の学問によつて明らかにしたことを、身をもつて検証されました。石原先生は「生きてきたように死に」、さらに「死の床の真ん中で生命を発見した」と言えるでしょう。

文献一覧

- (1) 松村克己「石原謙博士の人と学問」、『理想』一六二七号、一九七六年、一四三三〜一四三八頁。
- (2) 白井常「石原先生」逝去の一八日前」、『石原謙著作集』第一一卷月報、岩波書店、一九七九年、一〜三頁。
- (3) 山本和編『死と終末論』創文社、一九七七年。『石原謙著作集』第一一卷、岩波書店、一九七九年、五七五〜五九五頁。

司会 どうもありがとうございました。石原謙という方の生涯を通してグリーンフケアのさまざまなポイントを端的に、また深く教えていただいたような気がいたしました。

す。それではここで十分間の休憩をとらせていただきます。